



九条の樹

東久留米「九条の会」ニュース 第18号

2008年11月発行・東久留米「九条の会」

代表者 古田足日・連絡先 鈴木Tel 042-473-9489

<http://members2.jcom.home.ne.jp/hgsk9jk/>

聖書と護憲

岸 亮夫

(東久留米キリスト者九条の会)

代表代行)

「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向つて剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」

旧約聖書 イザヤ書第2章4節

キリスト者九条の会は昨年8月に発足して毎月憲法や聖書を通して、私たちがどのようにそれらを知っているか、信徒として日常の中でそれらを理解し、今の世の中を見ていつた時にどのように判断をしていくかなどを、キリスト者としてお互いに率直に話し合い学んでいます。

1930年頃から45年にかけてキリスト教が大きく変化した時代がありました。反社会的、抑圧的弾圧の強化だった。唯一神信仰であるキリスト教は、時の政治思想に合致しません。当然、治安維持法に触れたのです。具体的にはこの状況下で自らの信仰を曲げて妥協せざるを得なかった信仰者もありました。天皇を現人神として受

私の主張

け入れたのです。一方では断固として抵抗して獄死した牧師たちもありました。

1942年6月26日のことでした。当時の教会学校のテキストを一つ紹介します。皇紀2600年昭和15年「美しき日本」(2月8日付け)と題して(部分)

「然し流石にヒットラーは正しい所に目をつけ『それは日本が万世一系の天皇を戴いて世界に類のない立派な国体を持っているからだ』と言って羨ましがりました。』」

キリストを十字架に付けるために売って

しまったあのユダの行為を当時のキリスト教はしてしまいました。

そして一丸となって宗教界は(一部を除いて)大政翼賛化に雪崩込んでいったのです。個人の考えをまったく抹殺し、信仰も自ら否定してしまいました。

私たちは、過去にそうした異常な軍による政治で生命と身体に深い傷を受け、精神にも大きな痛みを負いながら、信仰を継承してきたのです。

九条・人権・教育・自由などは、私たちに密接な関わりを持っている憲法です。今の憲法をしつかり守り後戻りをしない、のちの子どもや孫たちにこれを伝えて行きたいと考えずにはいられません。

地域の取り組み

◆前沢・南町九条の会

—8月15日を語るつどい—

2008年8月23日(土) 南町地区センターには、21名が参加しました。

語り手は児童文学作家で南町在住の高田桂子さん、昨年のキジムナーをみて憲法ミュージカルにとりくんだ中学生の原まりこさん。若い人が真剣に平和に取り組む姿は素晴らしいものでした。高田さんは1945年8月14日、広島生まれ。みんなに伝える人がいて、今の私たちがいる。そうした連鎖の一つでずっとありつづけたいと述べました。フリートークでは、それぞれの体験から、貴重な、感動的な発言が続きました。
 ・きょうだいでも終戦時の境遇、感じ方は違う。伝えることは大事。
 ・引き揚げ体験の飢えと絶望と恐怖はもうイヤ。
 ・原水禁大会参加の半数が若者となり、変化が生まれてる。
 ・多磨全生園のハンセン病患者の強制収容は、満州事変の年、1936年、15年戦争のはじまりの年。人権抑圧、差別と戦争は密接不

可分。しかし、日本は、戦争も強制隔離も反省していない。
 ・イラクの戦争もアメリカの軍事産業のためと聞く。
 ・チャップリンの「殺人狂時代」で、「一人殺せば殺人者、大量殺人は英雄だ」の言葉が怖い。
 ・戦争の犠牲者はいつも弱い人たち。どう語り継いでいくか、私たちの責任だ。
 ・焼け跡で、男だか女だか、子どもだか大人だかわからない消し炭のような死体をみた。いまでもサイレンや花火などの音を聞くこと恐怖感を感じる。
 ・8月15日、「今日から寝られる。もう防空壕に入らなくていい」と思った。

◆西部九条の会

—連続講座「語りあおう、今と憲法」—

第1回 「つくりだされた貧困」

9月14日(日)午後2時から西部地域センターで連続講座・第1回「つくりだされた貧困」を開催しました。当日の参加者は、約30名で、映像や統計資料により、貧困がひろがり、その原因がどこから起きているのかなどのリポーターの報告がありました。

周辺で起きている貧困や野宿者、青年のおかれている実態、貧困は自己責任から起こっているのではないことなど、時間を延

長して話し合われました。



連続講座第1回「つくりだされた貧困」

◆東部九条の会

—東部9条の会3周年記念学習会—

私たちにとつても身近なビラ配布を弾圧する事件が全国各地で起こっています。そこで葛飾ビラ配布弾圧事件について学習しました。講師に「ビラ配布の自由を守る会」の事務局の中江秀夫氏に来ていただきました。

04年12月、荒川庸生(ようせい)さんがマンションに静かにビラ播きをしていたら、通報され逮捕・23日間も拘留、起訴さ

れた事件です。

東京地裁では無罪判決でしたが、東京地検は強引に控訴しました。驚いたことに07



「ビラ配布の自由を守る会」の事務局の
中江秀夫氏

年2月東京高裁は、一審判決をくつがえして罰金5万円の有罪判決を下しました。裁判官は始めに結論ありきで、法も事実も無視し有罪としました。

荒川さんと弁護団は直ちに上告し、最高裁での無実を目指して戦っているところですよ。

民主主義と国民のくらしを守るために「ビラ配布の自由を守る会」への入会を呼びかけたところ、会費10000円を奮発して18人の方が賛同してくれました。後日

「守る会」からわざわざお礼の電話がありました。

ビラ配布を弾圧するのは、ビラがそれだけ世論に影響を及ぼしていることの証で、押されているのは弾圧する側だと講師は強調していました。

◆本町・中央町九条の会

10月5日、本町・中央町にも「九条の会」設立致しました。――

このたび、私たちの地域にも「九条の会」を設立でき、ここから平和への願いを発信してゆきたいと思います。と同時に、東久留米市全域に「9条の会」が完成したことを喜び合いたいと思います。

総会当日には、68名の方々のご賛同（内、呼びかけ人は58名）いただき、39名もの方がご参加いただきました。

総会は、「憲法九条を世界へ」の歌で開演し、塚田勲先生のご講演『九条の原点とその後のあゆみ』には誰もが「眼を見開かれた」と大反響でした。私も、「当時、国民の3/4もが憲法を新しく変えた方がよい」、「70%もの国民が武力行使は禁じたのがよい」とした資料には驚きました。これこそは国民が自らの意志で「九条」を手にした証だ。

私たちの運営主体は世話人会ですが、それも全賛同者の主体性を願い、誰もがいつでも参加でき、その参加者の総意で決定するように致しました。そうであってこそ、全国民の過半数を獲得する国民的運動なのだと思います。日本の民主主義、平和の発展を願って。

（事務局 山室哲）

◆お知らせ

●小山・幸町九条の会
憲法学習会

― 国民投票法の本質とそれをめぐる動向について（仮題） ―

日時・11月16日（日）午後2時～4時
場所・さいわい福祉センター・ホール
講師・萩尾健太弁護士

●西部九条の会

連続講座「語り合おう 今と憲法」

第2回「平和のつくりかた」

日時・11月16日（日）午後2時～4時30分
場所・西部地域センター講習室2・3

●前沢・南町九条会

憲法学習会・12月中旬予定

お詫びと訂正

前号（17号）3ページ前沢・南町九条の会の取り組み「憲法を読む会」講師の名前に誤りがありました。正しくは「塚田勲氏」です。

◆リレー投稿

私の戦時下

——昨年亡くなった故
斉藤義人氏の遺稿から抜
粋したものです。——

私は1930年、長野県小諸市に生まれました。当時は軍部や政府から「満州は日本の生命線である」と喧伝され、満蒙開拓の世論が高まっていました。

不景気が続き商売も先細りとなつて、私の一家は1942年満州に渡り、奉天の近くに「小諸郷」と言う開拓団として入植しました。開拓団とは名ばかりで、実際には憲兵や警察の権力を背景に、中国人や満州人からタダ同然で奪うように買い取つたものでした。この土地の収奪がやがて敗戦のときの襲撃となつて仕返しをされるはめになるとは夢にも思いませんでした。

小学校時代つらかったのは水汲みです。開拓団には上水道が無く、500メートルくらい離れた井戸まで毎日天秤棒に水桶をつるして我が家まで何回も運ぶのが子どもの仕事でした。そんなさなか突然大黒柱の父を病で亡くし生活がいつそう厳しくなり

ました。私はまだ15歳になつたばかりでした。

そして運命の1945年8月9日、ソ連が日ソ中立条約を破棄し日本に宣戦布告したのです。8月13日になつて北東80キロにある鉄嶺へ逃避行が始まつたのですが、立場が逆転した中国人たちに襲われ家財道具などはすべて没収されてしまいました。姉が大事そうに最後まで隠し持った父の位牌まで奪われました。さぞかし高価なものと勘違いされたのかもしれない。

ようやく目的地についてもすでに関東軍は撤退した後で、破壊された空き家があるだけで食料が何もないのです。本当にひもじい思い、飢餓と言うものを生まれて初めて経験しました。背に腹は変えられず食糧確保のため、ソ連に持ち帰るための穀物を貨車から「かつぱらう」こともやりました。もちろん見つければマンドリンと呼ばれた軽機関銃で射殺されます。何人か不運な人もいました。しかし「何もしなくても餓死するだけなので同じ死ぬのなら」と命がけで南京袋に入った小麦やコウリヤンを盗み出して中国人に売りさばき金にして、米や肉を買って飢えをしのぎました。

《平和を考える本》

『平和へのアクション101+2』

メリーウィン・アシユフオード・著

(株)かもがわ出版・2600円＋税

著者は、カナダ生まれの医師。1985年にノーベル平和賞を受賞した「核戦争防止国際医師会議」(IPPNW)の元会長。今、我々の直面している問題―核兵器戦争、テロ、暴力等―に対して、それらを解決するための102のアクションを提言。

提言の一つ一つが見開きで語られ、実在の魅力あふれる人物の活動が平易な言葉で紹介されており、中でも子供たちの意表をついたやり方に驚かされる。

例えば、アメリカの小学生サマンサ・ミスが、1983年、当時のソ連の最高指導者に宛てて、平和を望んでいるかどうかを尋ねた手紙の話。またコロンビアの少女が、世界に対して、子供にもっと大きな役割を与えるべきだと訴えた話。――どの国も、『子供は国の未来だ』といいますが、私達は未来なんかじゃありません。私達は現在なのです。みんなが力を合わせて築き上げるべき現在なのです、と。

今、何をなすべきか、何をすべきかはいいのかが、じつくりと胸に沁みる本である。

原稿を募集しています。
事務局まで声をかけてください。